

東京におけるオオカナダモとコカナダモの分布

百瀬忠征

(都立戸山高等学校)

筆者は、高校における生物実験の材料として、また自分の研究材料として、オオカナダモとその仲間の水生植物にかかわってきた。はじめは材料入手が目的で、オオカナダモやコカナダモの自生地を調べ、それらを「遺伝」¹⁾や「東京都生物教育研究会会誌(都生研会誌)」²⁾などに報告してきたが、今回それらをひとつにまとめてみた。東京におけるオオカナダモとコカナダモの、今後の変遷を知るうえでの資料としておきたい。

東京は図1に示すように、多摩川水系と荒川水系とはさまれ、各河川はどちらかの水系に属することになる。多摩川や荒川・隅田川の本流には、オオカナダモやコカナダモはみられないが、図1に示された3ヶ所の水域にはそれらの自生が見られる。

1. 秋川流域

1968年、筆者は秋川にコカナダモの自生を確認したが、これは関東にコカナダモが帰化した最初の記録であっ

た³⁾。1970年の調査結果を図2に示した。五日市より下流の秋川、平井川にはほぼ全域にコカナダモが分布し、多摩川では上限が平井川の合流点、下限は中央高速道の橋付近にまで分布していた。当時は浅川や拝島までの玉川上水にも多くのコカナダモがみられた。

1986年現在では、平井川と多摩川にはコカナダモがみられなくなり、秋川の一部に細々と自生するのみとなった(図2)。この10年間の変遷は、秋留台地の宅地開発が進み、生活排水が多量に流入するようになったためと考えられる。

一方、オオカナダモの自生は、秋川・多摩川流域では確認されていない。

2. 神田川流域

神田川は、善福寺池からの善福寺川と、井の頭池からの神田川が中野区弥生町で合流し、隅田川にそそいでいる。1981年に調査した善福寺川と神田川におけるオオカ

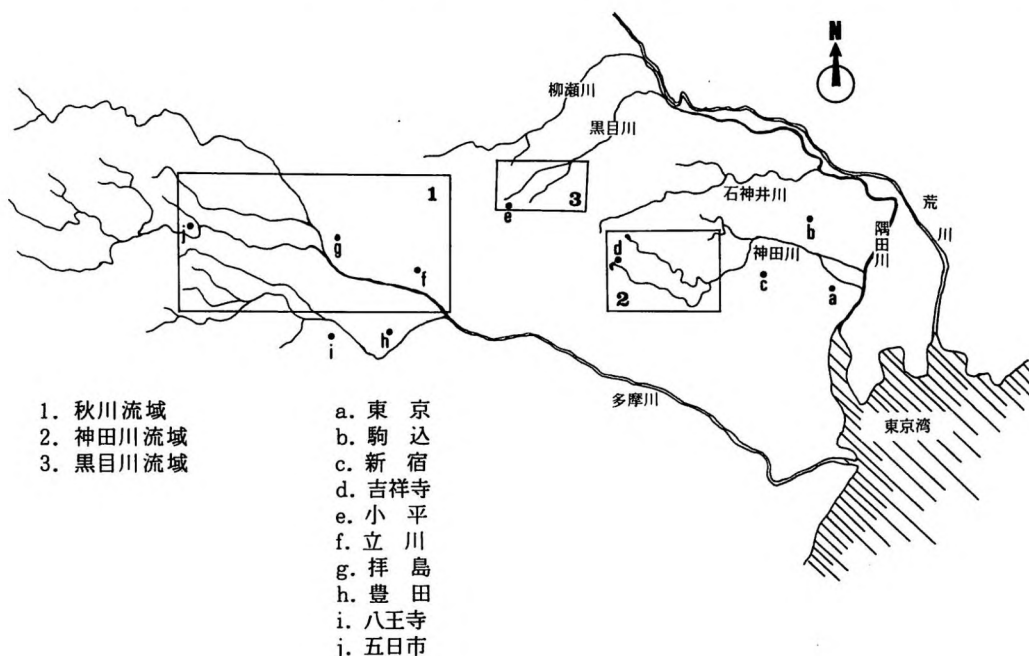


図1 東京の主な河川

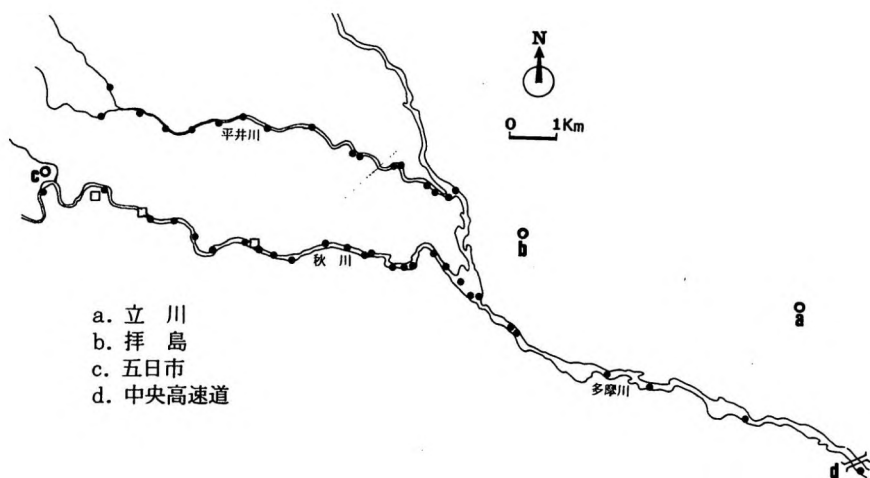


図2 秋川流域のコカナダモ (●1970年のコカナダモの分布) (□1986年のコカナダモの分布)

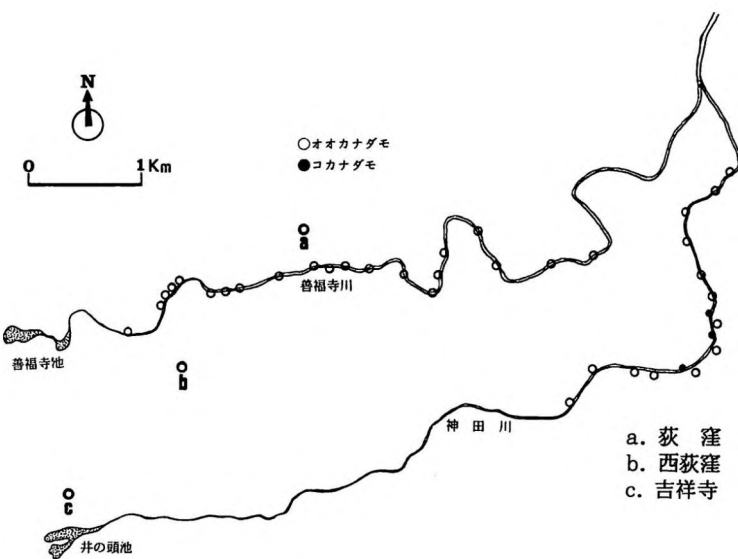


図3 神田川流域のオオカナダモとコカナダモ (1981)

ナダモとコカナダモの分布を図3に示す。オオカナダモは、善福寺川では上流に、神田川では下流に分布しているが、量的には善福寺川の方が多い。また、神田川にはコカナダモの侵入が見られ、今後の変化が気になるところである。

1986年現在、善福寺川と神田川でのオオカナダモとコ

カナダモの分布には、大きな変化はみられない。ただ、1975年に飯田橋付近の外堀で自生が確認されたコカナダモは、1986年現在では見られなくなった。

3. 黒目川流域

黒目川は、小平市を水源とする黒目川と、東久留米市を水源とする落合川とが合流し、荒川にそそいでいる。黒目川は下水道のようになってしまい、水生植物は見られないが、落合川にはオオカナダモとコカナダモが自生している。1981年の調査結果を図4に示す。1978年の調査では、落合川全域にわたってコカナダモは見られなかった。

落合川の本流は生活排水が流入し、かなり汚れているが、流域の6ヶ所からの湧水が加わることで、水生植物の自生がかるうじて維持されている。とはいっても、1986年現在ではオオカナダモ、コカナダモ共にその量が減り、分布図の訂正が

まもなく必要となるであろう。

4. その他の地域におけるオオカナダモ

〔善福寺池〕生嶋ら⁴⁾によれば、1973年にはオオカナダモがわずかに自生していたらしいが、1981年の調査では発見できなかった。絶滅したものと思われる。

〔井の頭池〕1933年頃から帰化したオオカナダモは、1964年まで大繁殖していたが、1965年の浚渫工事以来絶滅し、現在にいたっている。

〔六義園の池〕1972年、筆者は駒込にある六義園の池に多量のオオカナダモを確認したが、1982年の浚渫工事によって絶滅し、現在にいたっている。

〔豊田の池〕中央線豊田駅近くの湧水をためた小さな池に、オオカナダモの自生を確認したのは1978年だった。1986年現在ではそこが公園となり、池にはオオカナダモがほとんどなくなってしまった。

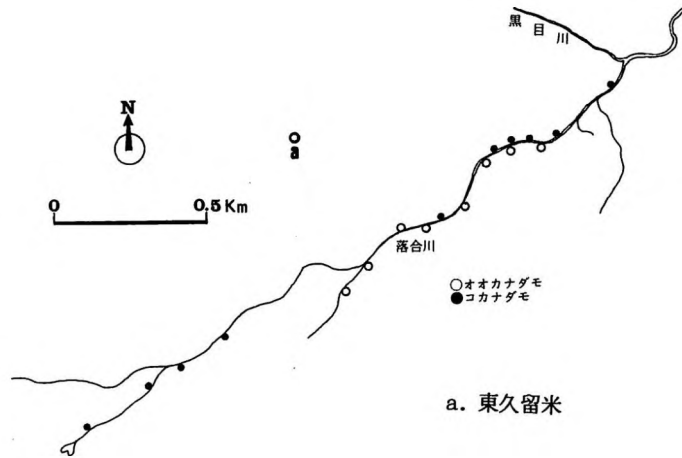


図4 黒目川流域のオオカナダモとコカナダモ (1981)

矢野⁹⁾によれば、1958年頃の東京では、すでにクロモの採集がむずかしくなっていたらしい。クロモはオオカナダモにとってかわられたが、そのオオカナダモの自生地も減少し、現在にいたっている。その後侵入してきたコカナダモは、秋川流域で猛威をふるったが、それも絶滅しようとしている。このような歴史の中で、都心部を流れる善福寺川のオオカナダモは健全である。これは、下水道が完備したことと、毎年繁殖したオオカナダモを刈りとり、川の手入れをしているためと思われる。

水生植物の変遷の歴史には、人間の生活がよく反映さ

れている。このような観点から水生植物を見なおし、その変遷を、今後注意深く見守ってゆきたい。

文 献

- 1) 百瀬忠征. 遺伝. 28(9), 84-89 (1974).
- 2) 百瀬忠征. 都生研会誌. 18, 1-5 (1982).
- 3) 大滝末男. 植物採集ニュース. 66, 69 (1973).
- 4) 生嶋 功・大滝末男. 都市生態系の構造と動態に関する研究 (1976).
- 5) 矢野 佐. 遺伝. 12(6), 48-51 (1958).

○辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集 館林の池沼群と環境の変遷史』(館林市教育委員会, 1986年3月, 110頁+図版I~XXXV)

関東平野の北西部に位置する館林市(群馬県)の池沼群、すなわち茂林寺沼、古城沼、多々良沼、蛇沼の堆積物の研究から、当該地域の植生と環境の変遷史を構築しようとした試みの報告書である。水生植物の変遷史を中心課題のひとつとして、これほど実証的な検討が行なわれた例は、今までになかったであろう。

この調査の目的は、当然のことながら館林の池沼群の研究にあるが、著者たちのねらいはそれにとどまらない。「池沼群と環境の変遷史を解き明かすためにどのような

調査・研究が講じられるべきかを模索し、その方法の一例を示すとともに、この調査・研究の重要な部分を占める植生史の研究のあり方を考えることである。」著者は、それぞれ花粉化石、大型植物化石、珪藻化石を中心に日本の植生史を再構築しようと精力的に活躍しておられる新進気鋭の研究者であるが、その意気込みが知れようというものである。

最後の章は主要植物化石の記載である。多数の水草の花粉あるいは種子遺体の記載とプレート写真が含まれる。「……これらの記載は…読んですぐさま役立つという性格のものではないが、今後の研究の展開に重要な役割を果たすはずである。」という著者の考えにもとづくものである。(角野康郎)